

令和6年度

私学経営研修会

実施報告

研究のねらい

教育のフロントランナーを目指す ～新たな価値を生み出す経営戦略とは～

若者が将来に希望を持ちにくい現代社会だからこそ、建学の精神を具現化した先進的で質の高い教育が、若者達、ひいては日本の未来をも輝かせるというポジティブな思いを持った取り組みが私立学校に求められている。

今年度当研修会は「教育のフロントランナーを目指す～新たな価値を生み出す経営戦略とは～」を研究のねらいに開催する。開催地に縁のある講師や私学関係者によるパネル・ディスカッションに加え、参加者の交流の場として、グループ討議形式での意見交換会と教育懇談会を実施する。2日目には特色ある教育を実践する学校法人石川高等学校・石川義塾中学校を視察する。質の高い教育を展開し、生徒・保護者から熱い支持を受ける同校の視察から、大きな学びを得ることが期待される。当研修会が、これからの経営戦略を模索するための機会となるよう願っている。

★会期 令和6年6月6日(木)～6月7日(金)

★会場 八幡屋 〒963-7831 福島県石川郡石川町母畑温泉 TEL:0247(26)3131(代)
(福島空港から車で約10分、JR磐城石川駅から車で10分、JR郡山駅から車で約1時間)

★視察校 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校
〒963-7853 福島県石川郡石川町字大室502番地 TEL:0247(26)5151
(JR磐城石川駅から車で5分)

○参加者数 76名

○参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務長またはこれらに準ずる管理職の方
※参加対象校は、都道府県私学協会加盟の私立中学校・高等学校・中等教育学校

○講演Ⅱ 「事業の承継・継続・発展をめざして」
渡邊 忠栄 株式会社八幡屋相談役

○プログラム

時刻	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
		30	30 40	40	40	50	20	10	15	45
6月6日(木)		受付	開会式	講演Ⅰ(60分)	昼食	意見交換会A(70分)	パネル・ディスカッション(120分)	講演Ⅱ(50分)		教育懇談会(90分)
6月7日(金)			意見交換会B(80分)	総括	昼食	移動	学校視察(120分)	移動		



八幡屋



学校法人石川高等学校・石川義塾中学校



令和5年度研修会の様子

◇主催 一般財団法人日本私学教育研究所 ◇後援 福島県・石川町、福島県私立中学高等学校協会、日本私立中学高等学校連合会

一般財団法人日本私学教育研究所 私学経営研修会担当 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-3-8 市ヶ谷UNビル6階

電話 03(3222)1621 FAX 03(3222)1683 ホームページ URL <https://www.shigaku.or.jp/>



☆ 研修会日程・プログラム

【1日目】6月6日(木)

《会場》八幡屋3階「飛鳥」

司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

10:30-11:00	受付
11:00-11:30	<p>開会式</p> <p>◇主催者代表挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長</p> <p>◇開催地代表挨拶 森 涼 福島県私立中学高等学校協会会長</p> <p>◇来賓祝辞 内堀 雅雄 福島県知事</p> <p>◇役員・専門委員紹介</p> <p>◇研修会運営方針説明 長塚 篤夫 一般財団法人日本私学教育研究所副理事長・私学経営専門委員長</p>
11:40-12:40	<p>講演 I</p> <p>◇演題 「教育政策と私立学校」</p> <p>◇講師 長塚 篤夫 日本私立中学高等学校連合会常任理事・運営役員/一般財団法人日本私学教育研究所副理事長</p>
12:40-13:40	<p>昼食※着席形式(意見交換会 A のテーマ卓) 《会場》同3階「磐城」</p>
13:40-14:50	<p>意見交換会 A 《会場》同3階「磐城」</p> <p>◇テーマ 「教育のフロントランナーを目指す～新たな価値を生み出す経営戦略とは～」</p> <p>◇重点テーマ</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>① 次代へのビジョンと経営戦略(ブランドビジョン、少子化対応、私立学校法改正、組織活性化)</p> <p>② 未来を創造する力を育む教育 (ICT 活用教育、グローバル教育、探究学習)</p> <p>③ これからの教職員のあり方とキャリア形成 (働き方改革・職場環境、採用、育成・研修・評価)</p> <p>④ 私学の特色と情報発信 (特色教育、生徒募集、広報・ブランディング)</p> </div> <p>※4つのテーマについてグループに分かれ、参加者による意見交換会(司会は参加者が務めます)</p>
15:00-17:00	<p>パネル・ディスカッション</p> <p>◇テーマ 「教育のフロントランナーを目指す～新たな価値を生み出す経営戦略とは～」</p> <p>◇パネリスト 森 涼 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長</p> <p>鈴木 康之 水戸女子高等学校理事長・校長</p> <p>大多和聡宏 学校法人大多和学園理事長</p> <p>◇コーディネーター 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長</p>
17:10-18:00	<p>講演 II 講師紹介・謝辞 森 涼 福島県私立中学高等学校協会会長</p> <p>◇演題 「事業の承継・継続・発展をめざして」</p> <p>◇講師 渡邊 忠栄 株式会社八幡屋相談役</p>
18:15-19:45	<p>教育懇談会 ※着席形式(意見交換会 B のテーマ卓) 《会場》同3階「磐城」</p> <p>○開会</p> <p>○主催者挨拶 山中 幸平 一般財団法人日本私学教育研究所副理事長</p> <p>○乾杯 山崎 学 福島県私立中学高等学校協会副会長</p> <p>○次年度開催地代表挨拶 石浦外喜義 一般社団法人鳥取県私立学校協会会長</p> <p>○閉会挨拶 平方 邦行 一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長</p>

【2日目】6月7日(金)

《会場》八幡屋3階「飛鳥」

司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

10:30-11:50	<p>意見交換会 B (教育懇談会と同じ卓にお座り下さい)</p> <p>◇テーマ 「教育のフロントランナーを目指す～新たな価値を生み出す経営戦略とは～」</p> <p>◇重点テーマ</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>① 次代へのビジョンと経営戦略(ブランドビジョン、少子化対応、私立学校法改正、組織活性化)</p> <p>② 未来を創造する力を育む教育 (ICT 活用教育、グローバル教育、探究学習)</p> <p>③ これからの教職員のあり方とキャリア形成 (働き方改革・職場環境、採用、育成・研修・評価)</p> <p>④ 私学の特色と情報発信 (特色教育、生徒募集、広報・ブランディング)</p> </div> <p>※4つのテーマについてグループに分かれ、参加者による意見交換会(司会は参加者が務めます)</p>
11:50-12:00	<p>総括 鈴木 康之 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営副専門委員長</p>
12:00-12:40	<p>昼食(自由席) 《会場》同3階「磐城」</p> <p>※学校視察参加者は12時30分に会場2階玄関ホールにお集まり下さい。</p>
12:40-16:20	<p>学校視察(ホテルより貸切バスにて移動)</p> <p>学校法人石川高等学校・石川義塾中学校<共学校> [会場からバスで10分]</p> <p>12:40 八幡屋→13:00~15:00 学校視察→15:15 八幡屋→15:35 福島空港→16:20 JR 郡山駅</p>

◆講師プロフィール◆

◇講演Ⅱ「事業の承継・継続・発展をめざして」

渡邊 忠栄 (わたなべ ただえい) 株式会社八幡屋相談役



昭和 23 年 2 月 12 日、福島県石川町生まれ。昭和 45 年、中央大学法学部法律学科を卒業後、昭和 47 年に有限会社八幡屋へ入社。

昭和 49 年取締役専務に就任後、昭和 58 年に鉄骨 6 階建増築、平成 2 年に鉄骨 8 階建増築。平成 4 年代表取締役社長に就任し、平成 6 年には株式会社八幡屋に組織変更。翌平成 7 年には鉄骨 8 階建増改築により、現在の本館が完成。その後平成 16 年に株式会社大川荘の代表取締役社長に就任し、再建に尽力。

平成 28 年になると 6 月に株式会社大川荘、9 月に株式会社八幡屋の社長を退任し、代表取締役会長に就任。後継をそれぞれ長男・次男に託す。また令和 3 年には株式会社八幡屋の会長を退任し、相談役に就任。現在に至る。

日本旅館協会福島支部副支部長や福島県旅館協会副会長、福島県旅館ホテル環境衛生同業組合常務理事、福島県温泉協会副会長、石川町観光物産協会副会長、芦ノ牧温泉旅館組合理事長、芦ノ牧温泉観光協会会長、などを歴任。

趣味はつり・旅行。妻であり八幡屋大女将である和子と同居中。

◆講師・指導員(順不同)◆

- 渡邊 忠栄 (株式会社八幡屋相談役)
- 森 涼 (学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長)
- 鈴木 康之 (水戸女子高等学校理事長・校長)
- 大多和聡宏 (学校法人大多和学園理事長)
- 平方 邦行 (一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長)
- 長塚 篤夫 (順天中学高等学校校長)
- 山中 幸平 (学校法人山中学園学園長)
- 広石 英記 (東京電機大学副学長)

◆専門委員・指導員(順不同)◆

- 長塚 篤夫 (順天中学高等学校校長)
- 鈴木 康之 (水戸女子高等学校理事長・校長)
- 西岡 憲廣 (札幌山の手高等学校理事長・校長)
- 山本与志春 (学校法人青山学院院長)
- 嵯峨 実允 (学校法人藤華学院理事長)
- 梅村 光久 (学校法人三重高等学校理事長)
- 摺河 祐彦 (姫路女学院中学高等学校理事長・校長)
- 大多和聡宏 (学校法人大多和学園理事長)
- 菅沼宏比古 (学校法人西海学園理事長)
- 森 涼 (学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長)
- 川本 芳久 (一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長)

◆意見交換会について◆

1. 意見交換会 A と意見交換会 B は異なるグループで意見交換会を行います。
2. 重点テーマの番号の卓にお座り下さい。(テーマ卓内の席は自由です)
3. 6月6日昼食～意見交換会 A は同一グループです。
4. 6月6日教育懇談会と6月7日意見交換会 B は同じ卓にお座り下さい。
5. 意見交換会の司会は参加者が務めます。

◇重点テーマ

- ① 次代へのビジョンと経営戦略 (ブランドビジョン、少子化対応、私立学校法改正、組織活性化)
- ② 未来を創造する力を育む教育 (ICT 活用教育、グローバル教育、探究学習)
- ③ これからの教職員のあり方とキャリア形成 (働き方改革・職場環境、採用、育成・研修・評価)
- ④ 私学の特色と情報発信 (特色教育、生徒募集、広報・ブランディング)

令和6年度私学経営研修会《視察校》

福島県の私立中学高等学校は、それぞれの建学の精神のもと、独創性豊かで先取的な教育を展開しています。今回の学校視察では、福島県私立中学高等学校協会の全面的な協力によって、**学校法人石川高等学校・石川義塾中学校**を訪問します。

学校法人石川高等学校・石川義塾中学校

【理事長・校長 森 涼】

本校は、明治25年6月5日、私立石川義塾という名称で創立されました。当時、教育を受ける機会に恵まれなかったこの地方の青少年にその機会を与え、空しく埋もれていく才能を掘り起こし、将来、国家、社会の発展に貢献する有為な人材を育成するためでした。令和6年度で132周年を迎える県内最古の私学です。これまで「行学一如」の建学の精神のもと、時代に先駆けた教育にチャレンジし続けてきました。現在も建学の精神に基づく価値観と7つの習慣Jを通して身につく人間力をループリックにより可視化するなどして、学力と人間力を備えたバランスのとれた人材の育成を目指しています。

スクールカラーは文武両道で、難関大学合格を目指す一方で、部活動の強化をはかっており、多くの部が全国大会に出場、優勝を果たしています。

コロナ禍の一斉休校中には、いち早くオンライン授業を実施し、現在はICT教育、探求型授業の推進に取り組んでいます。

☆視察プログラム

12:40	会場ホテル出発（貸切バス）
13:00	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校到着
13:10	視察校代表挨拶・学校紹介（DVD上映含む）
14:10	授業見学（3グループに分かれて視察します）
14:50	全体会 質疑応答 視察団挨拶（広石 英記・一般財団法人日本私学教育研究所特別招聘研究員）
15:00	視察終了、学校出発（貸切バス）

◆視察校 アクセス等◆

☆学校法人石川高等学校・石川義塾中学校

〒963-7853 福島県石川郡石川町大室 502 番地
<http://ishikawa-gijuku.ac.jp/>



学校法人石川高等学校・石川義塾中学校
アクセス

◆参加者へのお願い◆

①研修会場での動画・写真撮影等について

- ・当研修会での主催者記録係・取材メディア以外による録画・録音は禁止します。
- ・講師・発表者等の許可無く研修会の写真・内容等のホームページ・ブログや各種 SNS 等へのアップロードは禁止します。
- ・撮影した動画・写真は当研究所広報活動（刊行物・ホームページ掲載等）や取材メディアの新聞掲載等で使用する場合があります。会場内の様子を撮影する関係上、参加者が写真や動画に映り込む可能性がありますので、予めご了承下さい。

②視察校での動画・写真撮影について

- ・動画撮影については禁止します。
- ・生徒個人が特定できる顔写真等の撮影は禁止します。
- ・撮影した写真は学校内の研修や報告等に活用する場合に限り使用を許可しますが、学校のホームページや紀要・報告書等への掲載、各種 SNS 等へのアップロードは禁止します。
- ・撮影写真の使用後は速やかに破棄して下さい。
- ・視察中は視察校の指示に従って行動して下さい。

◆概要◆

68回目となる本年度当研修会は、6月6日(木)～7日(金)、福島県石川郡石川町・八幡屋において「教育のフロントランナーを目指す～新たな価値を生み出す経営戦略とは～」を研究のねらいに開催し、30都道府県から76名が参加した。

初日の開会式には鈴木正晃・福島県副知事が臨席し、内堀雅雄・福島県知事に代わり祝辞を披露した。その後は長塚篤夫・日本私立中学高等学校連合会常任理事・運営役員による講演Ⅰ、渡邊忠栄・株式会社八幡屋相談役による講演Ⅱを実施した。パネル・ディスカッションでは、森涼・学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長、鈴木康之・水戸女子高等学校理事長・校長、大多和聡宏・学校法人大多和学園理事長をパネリストに迎え、平方邦行・一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長がコーディネーターを務め、教育のフロントランナーとして新しい価値を生み出すための経営戦略について提言がなされた。その後、参加者はリラックスした雰囲気の中、教育懇談会で交流を深めた。

今年度は参加者同士の交流を促進するため、意見交換会は2日にわたって実施した。「次代へのビジョンと経営戦略」「未来を創造する力を育む教育」「これからの教職員のあり方とキャリア形成」「私学の特色と情報発信」の4つの重点テーマについて各校が直面する諸課題について語り合い、経験と課題を共有した。研修プログラムの軸となる午後の学校視察では、地域に根ざした特色ある教育を実践し「文武両道」「グローバルリーダー育成」に取り組む学校法人石川高等学校・石川義塾中学校を視察し、今後の私学の経営戦略を考察する機会となった。特に、学校視察参加者は54名と70%を超える高い参加率となり、視察校への関心の高さが窺えた。

参加者からは「最新の動向を知ることができて良かった」（講演Ⅰ）「経営者としての行動力とリーダーシップに感銘を受けた」（講演Ⅱ）「各校の建学の精神に基づく経営戦略が参考になった」（パネル・ディスカッション）「新たなネットワークを構築できた」（意見交換会）「校長をはじめとする首脳陣の計画性と教育への深い理解が、先生方を安心して新しい手法へと導いているのだと感じた」（学校視察）と、各プログラムへ好評が寄せられた。

地元関係者の多大な協力のもと、私学の躍進を目指して企画実施した当研修会は、所期の目的を達成し成功裡に終了した。

【1日目】6月6日(木)

◇開会式◇



(平方邦行・当研究所理事・所長、森涼・福島県私立中学高等学校協会会長、鈴木正晃・福島県副知事、長塚篤夫・当研究所副理事長・専門委員長)

○主催者代表挨拶（平方邦行・当研究所理事・所長）

フロントランナーを目指し経営戦略を持たなければ、これからの私立学校は立ち行かない。今回の視察校、学校法人石川高等学校・石川義塾中学校は132年間教育を実践し続け、多くの生徒や保護者から熱い支持を受けている。2日間の研修を通して私学経営とはどうあるべきか、共に考えていきたい。

○開催県代表挨拶（森涼・福島県私立中学高等学校協会会長）

時代の変化に柔軟に対応し、先進的で質の高い教育を提供し続けるために、私立学校の経営の健全性と安定性を高めることが必須だ。そのためには経営者としての戦略と、それを実現する具体的な戦術が求められる。今回の研修会が啓発の契機となり、充実したものとなれば幸いだ。

○来賓祝辞（内堀雅雄・福島県知事）【鈴木正晃・福島県副知事 代読】

東日本大震災、原発事故から13年余りが経過した。福島県は復興の歩みを進めてきた一方で、依然として多くの課題を抱えている。課題を乗り越え、復興と地方創生をさらに進めるために、将来を担う多様な人材の育成が重要であり、私立学校に対する期待は一層高まっている。本研修会が実り多いものとなることを期待している。

○研修会運営方針説明（長塚篤夫 当研究所副理事長・私学経営専門委員長）

本年度当研修会は、例年とは異なるくつろいだ環境での開催となっている。八幡屋は全国から多くの人を訪れる有数の旅館で、運営にも非常に魅力がある。学校法人石川高等学校・石川義塾中学校の視察はその実績を肌で感じる機会となるだろう。今回の研修会がこれからの経営戦略を模索する意義あるものとなることを願っている。

◇講演 I ◇

「教育政策と私立学校」(長塚篤夫・日本私立中学高等学校連合会常任理事・運営役員・当研究所副理事長)

少子化が進む中で、どの都道府県でも私学は厳しい状況にある。今年の学校法人石川高等学校の入学者は約 280 名を超えているのに対し、地元の公立高校はその 10 分の 1 の入学者数だったという。この差を生み出していくことが、少子化への 1 つの対応となるだろう。現在、公立高校は統廃合を進めているが、私学では学校数も私学に通う生徒の割合も減っていない。全国各地で私学が頑張っている様子が窺える。画一的な教育ではクリエイティブな人は生まれない。私学が多様な教育を実践することで日本全体に活力が生まれる。これが私学の役割だ。公私の役割を今一度議論し、私学の独自性と兼ね合いも主張していく必要がある。



通信制は急激に拡大している。私立の通信制は株式会社も含めて 211 校、生徒数は約 20 万人だ。これは私学の全生徒数の約 1 割にあたる。通信制は以前と質が変わってきている。学校によっては 3 万名以上の生徒がおり、こうした巨大な広域通信制が全国から生徒を集めている。設置認可県が強い力を発揮しながら設置基準を作っていく必要がある。通信制は新しいビジネスモデルであり必要性があると発信をしており、マスコミもポジティブに報じている。われわれ既存の全日制校もさらにメッセージを発信していかなければならない。不登校の生徒が公立や私立の通信制へ進む、進路の多様化が進んでいる。こうした状況で、通信制高校・全日制高校・定時制高校のあり方についての議論が改めて昨年からは始まり、文科省は中間まとめの段階で省令改正を行った。私学としても制度の内容を押さえながら、自校はどう対応するのかを決めていく必要がある。

日本の大学生は約 380 万人だが、アメリカ約 1,800 万人、インド約 4,000 万人、中国では約 5,700 万人に上る。この人数は国力に直結している。日本は数で勝てない分、質を上げなければならないが、日本に国際競争力がある大学は少ない。国際競争力のある企業や大学を生み出さねばならず、そのためには教育にお金をかける必要がある。国も高等教育まで支援を拡大しようとしているし、各自治体でも、少子化の原因の 1 つに教育費の問題があると認識しており、特に東京都などでは就学支援が進んでいる。私学独自の教育を展開するために、経常費助成費補助金を上げていかなければならない。

私学の教員は建学の精神に向き合い、独自の教育に向き合い、そして生徒の生涯に向き合える。これが公立にない私学の本質だ。この積み重ねが現在に繋がり社会に影響を与えている。その必要性が社会に伝わることで、厳しい状況にありながらも、生徒を集めることができるのではないか。

◇意見交換会 A ◇

昨年度に続き参加者が司会を行う参加者主体の形式で、また本年度は 1 日目と 2 日目の 2 回、別のテーマを選択する形式で実施した。「次代へのビジョンと経営戦略」「未来を創造する力を育む教育」「これからの教職員のあり方とキャリア形成」「私学の特色と情報発信」の 4 つの重点テーマについて各校が直面する諸課題について語り合い、経験を共有した。



◇パネル・ディスカッション◇

「教育のフロントランナーを目指す～新たな価値を生み出す経営戦略とは～」

パネリスト：森 涼 (学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長)

鈴木 康之 (水戸女子高等学校理事長・校長)

大多和聡宏 (学校法人大多和学園理事長)

コーディネーター：平方 邦行 (一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長)



(森涼・学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長、鈴木康之・水戸女子高等学校理事長・校長、大多和聡宏・学校法人大多和学園理事長、平方邦行・一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長)

●平方氏：最初にそれぞれの学校で大切にしているものを中心に、学校の紹介をお願いしたい。

○森氏：本校は中学と高校があり中学は2008年に設立した。中高合わせて全校生徒は897人の中規模の学校だ。スクールカラーは文武両道。生徒には勉強と部活動、あるいはさまざまな活動との両立を求めている。学校の歴史は非常に古く、明治8年に学校のある石川町で、東日本で初めての自由民権運動が始まった。その中心人物の河野広中や後に本校の理事長となる石川村村長の吉田光一など、地元で多くの自由民権運動の活動家が現れた。日本が大きく変わっていく中で彼らは人材育成が大事だと考え、学校を作ろうとできたのが本校だ。

○鈴木氏：本校は1931年にできた学校で、今年が93年目だ。その頃にできた女学校は裁縫学校が中心だったが、本校の創立者鈴木米蔵が、これからは女性が必ず社会に進出する時代になると確信し、社会に貢献する女性を育成するために、茨城で初めて女子に商業を教える学校としてスタートした。女子校で大事なことは共感と安心だと考えている。私は3年生に建学精神という授業を行っているが、「水戸女子高校の生徒としての誇りを感じているか」という質問を、必ず最初と最後の授業でしている。今年は83%の生徒が誇りを感じていると答えた。最後の授業でこれを100%にするのが私の仕事だと感じている。

○大多和氏：建学は1924年で、今年がちょうど創立100周年だ。本学の教育の柱の一つは次の時代を見据えて先んじて行う教育で、「先見・先行教育」と呼んでいる。100年前に「松江ミシン裁縫女学院」として開校したが、ミシンの需要がほぼない中で、創立者がこれからの時代に必要となると考えて始めた。その後も、島根県の私学で最初に普通科を作り、男女共学の中高一貫校も島根県初だった。先んじて行うということは、需要は多くない。どう需要を創造していくか日々試行錯誤が続いている。もう一つの柱は、「モラロジー」をベースにした道徳教育だ。いつの時代でも人間性を磨く教育は不可欠であり、私学が優位性を発揮できると考えている。

■私学に期待されることの変化

●平方氏：続いて私立中学・高校を志望する家庭は、学校に何を期待し、何を望むと考えているか。

○鈴木氏：生徒募集活動の一環として、中学生や保護者が学校に来た時に私と面談することがある。その時にこの数年、私が感じているのは、特に女子の場合、安心して通える学校を保護者が望んでいるということだ。生徒に手間をしっかりかけ、そこから生まれてくるのが保護者の安心感や信頼ではないかと実感している。

○大多和氏：今、教育制度が量的にも質的にも大きく変わりつつある。その中で私学は教育のフロントランナーとして独自性を発揮すべきだ。新しい取り組みへの関心度は、受験生より保護者の方が強いと感じている。その関心に応じて、公立にはできない教育を実践していくことが大切だと考えている。

○森氏：保護者、生徒が本校に求めるニーズは、進学実績、スポーツ実績、生徒指導など多方面だ。鈴木先生もおっしゃったように、学校に対する信頼感を私も大きく感じている。また狭い地域の中にある私学のため、地域とのつながりも密接だ。地域、保護者、生徒から信頼される学校であり続けたいと考えている。

●平方：東京では5月に私立中学受験の相談会を毎年開催している。参加者にアンケートを実施したところ、学校の雰囲気や、教育プログラムへの関心が急激に高まっていた。進学実績への関心はそれほど高くない。家庭の教育方針、関心が変わってきている。このあたりについてコメントがあればお願いしたい。

○森氏：地方でも徐々にそうした方向に向かっていると感じる。本校の生徒には、基本的な学力と人間力を身に付けさせたい。平成21年に「7つの習慣J」に出会い取り入れた。アメリカで成功した人たちの行動様式を調べたら、7つの共通習慣があり、学校の授業で子供たちにその習慣を身につけさせ、成功に近づけるといいう教育法だ。ものの見方や考え方を養い、チャレンジ精神を育む授業をして、人間力を育てている。そして人間力を測るためにルーブリックを作成して可視化してきた。

○鈴木氏：当校では新型コロナの感染が拡大してから保護者の送迎が非常に多くなった。近隣に迷惑がかからないように、車で校内に入りロータリーを回って子供を降ろすようお願いしている。その時に私が保護者と話することができる。アイコンタクトやあいさつをして、自然に保護者とのつながりを作っている。そういう雰囲気は大事にしたい。

■私学が考える少子化対策

●平方氏：次に少子化について掘り下げたい。子供の数の大幅な減少を私学は自覚していなければならない。先生方の学校での少子化対策について伺いたい。

○大多和氏：島根県教育委員会は来年度高校入試から特色入学者選抜を始める。いわゆる推薦で入学生を多く確保する形だ。これに対して、本学では、来年度から「パスポート入試」を始める。本学の特色や建学の精神に魅力を感じた生徒たちに入学してもらうために、本学のイベントや説明会に来たらその都度パスポートを発行し、3回パスポートが認定されたら、推薦入試の出願資格が得られる。一般入試の場合は、若干加点される。中学入試でも同様な取り組みを始める。

○森氏：少子化の中で規模を縮小して経営する方法もあるとは思いますが、規模が小さくなっていくと活気がなくなり、学校でなくなってしまう。本校は寮運営を広げ、広範囲で募集していきたい。具体的には今、お陰様で、

青森から沖縄まで全国の 21 都道府県から生徒が集まっている。他県から入学する生徒のほとんどは、部活動が主な理由だ。地域の子供が激減する中で、寮を活かした生徒募集が本校の特色と考えている。

- 鈴木氏：本校の場合は、小規模ながら第一志望の学校になることを目指している。そのためにオープンスクールの時には保護者を私が案内して、学校の中を見てもらう。去年は、オープンスクールに来て、その後受験した割合が 98%、受験して入学した割合が 88%とかなり高くなった。学校の雰囲気を見て共感し、そして入学してくれる学校にしていきたい。本校の運動部は 5 つだが、3 つの部がインターハイに進むほどの実力で、主に部活に取り組みたいという子も来る。一方では不登校に苦しんでいる子もいる。学校の手厚い指導により 3 年間で人生を変えるようなチャンスを与えたい。
- 平方氏：急速な高齢化と人口減少によって引き起こされる 2025 年、2030 年、2050 年問題について伺いたい。
- 森氏：2050 年問題として、全国の市町村で 770~780 の市町村が消滅するという報道があり、その中に石川町も入っていた。長期的なビジョンを立てるのが非常に困難な中で、まずは短期的なビジョンで対応していくしかないと考えている。文科省は令和 6 年度 DX ハイスクールで、1000 校に 1 校につき 1 千万円の補助をつけた。当校は採用された。この DX 化の流れには絶対に乗っていく必要がある。時代の流れには、都会も地方もない。これを一つの足掛かりとして更なる学校の DX 化を進めていきたい。
- 大多和氏：各私学の経営者の皆さんはこの問題を十分に認識されていると思うが、学校全体で共有化していくことが必要だ。一般の先生は、授業や担任を持っていると、判断の基準は日常業務が中心になり、将来にどんな問題があるか考える機会が少ない。経営者が教職員の問題意識を高め、共有を図る必要がある。
- 平方氏：大多和先生は長年、島根県私立中学高等学校連盟の会長をされていた。連盟での取り組みはどのようなものがあるか。
- 大多和氏：各校の外部研修の機会を増やしてもらうため、日私教研の研修会の参加費や旅費を助成している。参加を強制することはないが、各校の未来を見据えた教育の推進に役立てばよいと考えている。

■2025 年以降の教育を考える

- 平方氏：2025 年以降の教育はどう考えていけばよいか。
- 森氏：生成 AI の進化のスピードが速く、10 年後でさえ分からない状況だ。日本は他国に比べてデジタル関係が遅れているため、突き抜けていけるようにならなければいけない。保護者や子供たちは大きく多様化していて、それに対応するには ICT に頼らざるを得ない。新学習指導要領では、個別最適、協働的な学びが強調されている。それに対応するにもやはり ICT が不可欠で、もっと深めていく必要がある。
- 大多和氏：今から約 40 年前に出版された外山滋比古著『思考の整理学』という本には、「明治時代から日本人が勉強と称して努力してきたものは、多くが外国を真似るだけの受け身の勉強だった」とある。こうした勉強は、今もほとんど変わらない。外国から学ぶことも大切だが、わが国の歴史文化から学ぶことも必要だ。
- 鈴木氏：今の高校 1 年生は 2050 年には 44 歳になる。今は生徒たちが自分で調べれば、2050 年にこういう社会になっていると容易に情報を得られる。その社会で自分がどうするか授業の中で生徒たちに考えさせる。これからの時代は、生徒たちには女性が社会に貢献するリーダーシップを身につけることと、それから、情報等に左右されない豊かな感性を育むことを特に意識している。
- 森氏：これからの社会は我々が想像もできない位に変化していくだろう。受け身であってはいけないし、そうした変化に対応でき、主体的・能動的に生きていける人を育てないといけないと考えている。また、学校自体のシステムも変わる必要があるのではないかな。

■フロントランナーとしての私学の価値

- 平方氏：最後にフロントランナーとしての私学の価値を考え、それを生み出す経営戦略についてお話しいただきたい。
- 森氏：「不易流行」という言葉は私学にぴったりくる言葉で、不易である建学の精神を普段使いすることが非常に大事だと思っている。一方で、流行の部分を敏感に捉え、DX の波に乗りながら、学校全体がその方向に向かっていく。自分の学校にとって何がよいかを現在も模索している。先ほどループリックの話をした。20 テーマのループリックを作り、そのうちの 10 が建学の精神のエキスを取り出したものだ。建学の精神の中で、これだけは生徒たちに身につけさせて卒業させようというテーマである。残りの 10 テーマは、これからの社会の中で必要な思考力、判断力、表現力などで、日常的に生徒たちに自己評価させている。子供たちが自然とメタ認知する中で身につけていっているはずだ。フロントランナーとなるかは分からないが、改めて、不易な部分と流行の部分の融合が、大切なのかと考えている。
- 鈴木氏：私は文科省の学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議の委員になっているが、これからの学校施設のあるべき姿の例示を見ると、それは全て既に本校で取り入れていることだった。東日本大震災で被災し、1 年 10 カ月で校舎を完成させました。文科省が考えていることを全部入れ込み、それ以外のことをも取り入

れている。フロントランナーになるには、しっかり考えることが必要だ。本気で考えればいろいろな道筋が自然に見えてくると思う。

○大多和氏：私が私学経営を教わった先生は、「要求に応え、その要求の構造を変革する教育」を実践された。「要求に応える」とは、生徒・保護者が求められているものを提供することで、「要求の構造を変革する」とは、建学の精神を生徒・保護者の中に伝えていくこと。その先生の学校では、保護者から進学実績を求める声が大きかったので、まずそれに応える。一方で仏教系の学校なので、建学の精神である仏教の教えの大切さを生徒・保護者に理解させられた。そういう教育がフロントランナーとして必要だと思う。そして、過去や伝統への感謝が未来を創造する大前提であると考えている。

●平方氏：最後に、明日学校を視察させていただき森先生にもう一度お話を伺いたい。

○森氏：全国各地から集まる生徒の可能性を広げながら、地域や保護者や卒業生からも信頼される経営をこれからも展開していきたい。



◇講演Ⅱ◇

「事業の承継・継続・発展をめざして」(渡邊忠栄・株式会社八幡屋相談役)

学校法人石川高等学校・石川義塾中学校は石川町のランドマーク的な存在であり、八幡屋も学法石川のある石川町にある母畑温泉、とのキャッチフレーズで営業し、段々と第二のランドマーク的な存在になることができた。人生のライフサイクルと同様に、創業、成長、発展、成熟、衰退、第二の創業、という企業のライフサイクルを実感している。その周期は30年が目安だと思う。企業の目的は色々あるが、一番は企業の存続・継続であり、事業承継によってその寿命を延ばすことができる。本日は自身のライフサイクルと連動してきた八幡屋のライフサイクルの中で、現在の姿に至るまでの成長と発展の事例をお話する。



八幡屋は昭和58年に第一期設備投資をした。それまではお客様のお越しを待つ湯治旅館だったが、投資や営業をしてお客様を呼べる旅館となるため、これが第二の創業である。その後は平成2年の設備投資が成長期、平成7年の設備投資が発展期にあたる。成熟期にあたる平成13年にも設備投資をしている。その後、リーマンショックや東日本大震災、コロナ禍を経て、まさに成熟から衰退を迎えた。令和元年に第三の創業ということで、設備投資とともに社長をバトンタッチして現在に至る。旅館にとって設備投資は商品の仕入れで、節目節目に設備投資をしないと継続発展できない。旅館の商品は設備・料理・サービスである。施設が良くなればそれに準じて料理・サービスも良くなる。そういう形で成長・発展・成熟というライフサイクルを辿ってきた。最も苦労したのはやはり昭和58年の第一期設備投資だ。お客様を待つ受注産業型だったところから、売上の何倍もの見込み投資に踏み切った。当時セミナーに出席すると、50~60代の経営者がこれからの旅館のマーケティングを論じていた。まだ30代であった自分が、経営努力もせずただお客様を待っているだけで良いのかと思い、立地条件が悪くても設備・料理・サービスがしっかりしていればお客様を呼ぶことができると考えた。苦労もしたが売上は増え、その後も設備投資を行い規模の拡大と経営効率を追求した。倒産か存続かという危機意識は常に頭にあった。生き残るために、旅館経営の方向性をどうすれば良いのか。30年の体験で辿り着いた結論は、お客様もそこで働く社員も、皆が心とむ旅館づくりという基本理念だ。組織運営としては社員第一、企画営業面ではお客様第一を掲げている。

生き残る条件というのは、商売の仕組みの原理原則にそって評判旅館と繁盛旅館を形にしていくこと。評判力が上がれば収益も増え繁盛旅館になることができる。繁盛旅館を目指し経営努力をしなければならない。「運命は、夢を持つ者を導き、運命は、夢なき者を引きずる」「夢もつ者は、運命を切り開き、夢なき者は、運命に引きずられる」ことを実感している。「夢をかたちに」するためには、Check・Plan・Doのサイクルを回すことが必要だ。まず現状をチェックし、圧倒的な商品力、営業力を目指してプランを立てて、それを販売する。そのためには意志決定、リスクテイク、設備投資、原理原則に則った経営を、行動基準に沿って実行に移す。そして商売の仕組みをつかむ。リスク管理、計数管理の中で夢を実現する。行動の原動力は、良い経営者になろう、良い会社を作ろうという、リスクを恐れずにリスクに立ち向かう経営者の夢だ。その夢を実現するために、商売の仕組みをつかみ原理原則に則り、圧倒的な商品力と販売力を目指した行動をすることが、会社の存続発展の、ひいては良い経営者・良い会社をつくるための条件なのである。

◇教育懇談会◇



(山中幸平・当研究所副理事長、山崎学・福島県私立中学高等学校協会副会長、
石浦外喜義・一般社団法人鳥取県私立学校協会会長、平方邦行・当研究所理事・所長)

山中幸平・当研究所副理事長の主催者挨拶に始まり、山崎学・福島県私立中学高等学校協会副会長による乾杯の後、参加者は少人数のグループ毎に交流を図った。石浦外喜義・一般社団法人鳥取県私立学校協会会長が次年度当研修会開催地を代表して歓迎の意を表し、最後に平方邦行・当研究所理事・所長より閉会挨拶があり、盛況のうちに閉会となった。

【2日目】6月7日(金)

◇意見交換会B◇

1日目と同様の4つの重点テーマについて、それぞれが1日目と別のテーマを選択し、意見交換を行った。

◇総括◇

鈴木康之（私学経営副専門委員長）

私立学校はこれまでと同様にこれからも日本の教育を牽引していく。本研修を通して、今後ますます私立学校の経営が厳しくなるという危機感を持っただろう。危機(Crisis)という単語はギリシャ語が語源で分岐点を意味する。スムーズに次の時代に対応できるのか、分岐点のどちらに進むのかを決めるのが経営者の使命だ。意義ある教育活動を展開し、生き残る私学ではなく、なくてはならない私学を目指したい。



◇学校視察◇

森涼・学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長による挨拶ならびに学校紹介の後、各所に点在する施設等を紹介するDVDを上映した。岩瀬俊介・イノベーション推進部主任による学校説明や質疑応答を行い、視察校教諭の案内で数多くの授業を視察した。参加者の参加率も高く、大変好評であり、実りの多い学校視察となった。



◇都道府県別参加者数◇

No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数
1	北海道	1	17	石川	1	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	0	34	広島	3
3	岩手	1	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	4	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	1	21	岐阜	0	37	香川	0
6	山形	5	22	静岡	4	38	愛媛	0
7	福島	6	23	愛知	0	39	高知	0
8	新潟	0	24	三重	0	40	福岡	2
9	茨城	3	25	滋賀	0	41	佐賀	1
10	栃木	0	26	京都	1	42	長崎	0
11	群馬	1	27	大阪	9	43	熊本	1
12	埼玉	0	28	兵庫	0	44	大分	0
13	千葉	2	29	奈良	1	45	宮崎	0
14	神奈川	5	30	和歌山	0	46	鹿児島	1
15	東京	21	31	鳥取	1	47	沖縄	0
16	富山	1	32	島根	0			
学校視察参加者数(学校法人石川高等学校・石川義塾中学校)					54	計		76

◇参加者アンケートより◇

◎講演 I

- ・高等学校教育をめぐる最新の動向を知ることができて良かった。
- ・人口減や通信制等の情報が参考になった。また、他県の状態も分かったので今後に活かしたい。
- ・高等学校の現状や生徒収容に必要な公私間協議、公私比率などの問題点が理解できた。

◎パネル・ディスカッション

- ・個性の異なるパネリストからオーナー家としての覚悟と実践を学んだ。私学人としての気概を感じた。
- ・各校の建学の精神に基づく、フロントランナーとしての経営戦略が参考になった。
- ・それぞれの学校がどのように生き残っていくのか、私学の本質とは何なのかを学ぶことができた。

◎講演 II

- ・柔らかい物腰からは想像もつかない攻めの人生に感動した。経営者としての覚悟を感じた。
- ・夢の実現のためのリスク管理や、経営者の行動力とリーダーシップが参考になった。
- ・講演を通して、教育現場の今後の課題も考えさせられた。

◎教育懇談会

- ・和やかな雰囲気の中、たくさんの情報交換ができ有意義であった。
- ・色々な先生方と打ちとけることができ、次の意見交換会がスムーズにできてとても良かった。
- ・テーブル指定で新たな私学人との出会いがあったのが良かった。

◎意見交換会

- ・非常に有益で時間があっという間だった。
- ・多くの先生方が攻めの運営をされているのを聞いて、とても勉強になった。
- ・興味を持っていた話題について、各学校の取り組みや先進事例が聞けて大変勉強になった。

◎学校視察

- ・校長がリーダーシップを発揮し教員のスキルアップ、建学の精神の浸透を図っている点が勉強になった。タブレットの日常的な利用や非認知能力のルーブリック等、学びが多かった。
- ・県内最古の私学であり、地域とのコミュニティを大切にする姿勢に学ぶ事が多かった。
- ・他校、他地方の学校の視察には多くの気づきが得られる。良い時間だった。

-

次年度（令和7年度）私学経営研修会は
鳥取県鳥取市・ホテルニューオータニ鳥取において
令和7年6月5日(木)～6月6日(金)に開催致します。

-